

教育開発支援センター  
活用案内 CTL

教育開発支援センターでは、高等教育に関する様々な書籍をご用意しております。市販の図書に加え、各大学の紀要や報告書等も充実しております。閲覧・貸出は自由ですので、お気軽にお越しください。ご推薦頂ける書籍等も随時受け付けております。教育開発支援センター(千里山キャンパス第2学舎1号館1階)までお気軽にお問い合わせください。今回は、教育の諸理論を網羅する事典類と高等教育を概説する書籍を中心に紹介します。

書籍紹介 (いずれも貸出可能です)

●教育学の諸理論に関する書籍

- 『教育工学事典』 日本教育工学会(編)(実教出版)
- 『教育思想事典』 教育思想史学会(編)(勁草書房)
- 『現代カリキュラム事典』 日本カリキュラム学会(編)(ぎょうせい)
- 『「学び」の認知科学事典』 佐伯胖(監修) 渡部信一(編)(大修館書店)
- 『教育学年報7 ジェンダーと教育』 藤田英典、黒崎勲、片桐芳雄、佐藤学(編)(世織書房)
- 『教育学年報8 子ども問題』 藤田英典、黒崎勲、片桐芳雄、佐藤学(編)(世織書房)

『教育学年報9 大学改革』

藤田英典、黒崎勲、片桐芳雄、佐藤学(編)(世織書房)

『教育学年報10 教育学の最前線』

藤田英典、黒崎勲、片桐芳雄、佐藤学(編)(世織書房)

●高等教育を概説する書籍

- 『高等教育概論—大学の基礎を学ぶ』 早田幸政、諸星裕、青野透(編著)(ミネルヴァ書房)
- 『高等教育入門—大学教育のこれから』 早田幸政、諸星裕、青野透(編著)(ミネルヴァ書房)
- 『大学教育学』 京都大学高等教育研究開発推進センター(編)(培風館)

予告 授業評価アンケートが変わります

平成23年度から本学の授業評価アンケートが変わります。授業評価アンケートの目的は「より質の高い教育を行うために、学生の声を反映させた授業改善を行うための貴重な資料を得ること」でした。今回の変更では、授業改善を「迅速に」かつ、「どのようなどころから」行っていけばよいかについて、これまでよりわかりやすい示唆を得られるようになります。主な変更点は以下の通りです。

●アンケートの実施回数及び設問

各学期に実施可能な回数を最大3回から2回へ変更します。また、これまで3回とも同じ設問でしたが、今後は学期中の授業改善に活用するための「中間アンケート」と、次学期以降の授業改善に活用するための「最終アンケート」で設問を変えます。「中間アンケート」はすぐに改善可能な8項目に限定

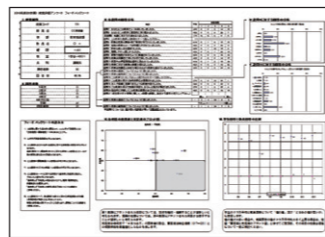
し、「最終アンケート」では詳細な分析(後述)に耐える20(外国語科目は19)項目を採用します。

●詳細な結果を記載した「フィードバックシート」の返却

「最終アンケート」では、これまでより詳細な分析を施します。その結果は「フィードバックシート」に記載され、各先生方へ返却されます。「フィードバックシート」の記載内容は、これまでの単純集計(平均値と度数分布)に加え、「充足度と重要度のプロット図」並びに「学生回答と教員回答のギャップ」です。各項目で「強く思う」「そう思う」の回答者割合を偏差値化した値を「充足度」、設問項目のうち総合指標となるものと各項目の決定係数を偏差値化した値を「重要度」とします。各項目の「充足度と重要度のプロット図」を掲載することで

「どの項目から改善すべきか」を平均値の高低以外からも考察することができます。また、教員にも学生と同様の設問に回答して頂くことで、学生との意識のギャップを知ることができます。それぞれの科目について、授業改善の方向性を多面的に考えることが出来るようになる点が特徴です。

その他の内容については「授業評価アンケート実施手順」をご覧ください。教育開発支援センターのWebサイトで閲覧することが出来ます。



授業評価アンケート「フィードバックシート」イメージ図

での問題にとどまらず、各大学の根幹的な問題に関わるような非常にデリケートな議論(いったん「研究大学」か「教育大学」か、といったような)をも含みこんだ内容であると感じますし、かなり「untouchable」な話題であるような気もいたします。しかし、それであってもなお、教員一人ひとりが真摯な態度で受け止めるべき事柄であるように思えてなりません。

教育開発支援センター長  
化学生命工学部教授 池田 勝彦

From センター長 「教育」と「研究」と

センターの書架にあった大学教育学会の学会誌を手すざびに読んでみると、初めて同学会の講演大会に出席した折の講演録が目にとまりました。大学における「教育と研究」に関するテーマについて何名かの先生方が登壇されたものなのですが、特に印象深かったのが、立命館大学(当時東海大学)の安岡高志先生の、「発表論文数」と「授業評価アンケート結果」の相関についてのご講演でした。

その講演で安岡先生は、データ解析の結果「発表論文数」と「授業評価アンケート結果」については「相関なし」であったとされ、そして結びとして「授業評価アンケート」と「論文発表数」とをデータとして用いることが、そもそも「良いこと」なのかという点に疑問が残るとおっしゃられたことが強い印象として今でも残っております。ただ、この安岡先生の解析の結果や提示された疑問については、教員個人レベル

「自校教育」に思う

教育開発支援センター長  
化学生命工学部教授 池田 勝彦

現在、多くの大学において、初年次教育のカリキュラムの中に自校教育が組み込まれている。その多くは、大学の建学の精神や歴史・今後の展望等、いってみれば大学の「これまで・いま・これから」を、入学したばかりの初年次学生に伝えるものであり、学生に大学への帰属意識や愛校心を持たせることを目的としているもののように思われる。

昨年末の12月22日に、自校教育をテーマにした寺崎昌男先生の特別講演会が、学内において行われた。この講演会は本学の全学共通教育K群科目の「関西文化圏と関西大学」の特別講義として開催されたこともあり、会場には多くの学部学生の姿を見ることができた。講演のテーマとしては「『自校教育』とは何か -「自分はどんな大学にいるのか」この大切な問いにむかって-」であった。実践者であるだけでなく自校教育そのものの提唱者であられる寺崎先生ならではのテーマ設定である。寺崎先生がこれまで立教大学で実践されてきた自校教育の歩みとその内容について、事例を交えつつのご講演であった。

寺崎先生のお話の中で、筆者にとって特に印象に残ったのは、自校教育を行うことによって大学が在籍学生にとっての「安心できる居場所」となり、また卒業生にとっては「安心できる寄港地」となるという点である。

自校教育に関してよく耳にすることとして、「自校教育を行うことは、学生の内面にその大学の学生であるというアイデンティティを形成し、それは良いことである。よって必修化すべきである。」といった

類のものがある。これはあくまで私見ではあるが、軽い違和感を覚えてきた。大学に入学したすべての学生にとって、その大学の学生であるというアイデンティティは果たして必須なものであろうかという疑問からくる違和感である。いいかえるなら、学生が大学以外の何かにアイデンティティを求めそこに拠って立つことがあってもよいのではないか、大学に入学したからといってすべての学生が全く同じアイデンティティを持つことを必須にすることが必要なのだろうかという違和感である。

そこへいくと寺崎先生が講演中におっしゃった、自校教育を行うことが学生や卒業生にとって大学を「安心できる居場所」で「安心できる寄港地」にするということであるならば、なぜ自校教育が重要なのかについて非常に腑に落ちる思いであった。つまり、自校教育を行うことが、将来へのキャリアパスを模索しアイデンティティを形成する苦しみに悩む学生にとって「安心して」軸足を置くことができる場所へと大学を変化させるのである。そういう視点からであるならば、昨今の学生を取り巻く現状を思うにつけ、自校教育の重みについて感じ入った次第であった。

本学においても、自校教育を目指した科目が全学共通教育科目のK群科目の中に設定されている。それらの科目について、学生が在籍大学をよく理解し「安心できる」場所と感ずることが可能となるものであるかどうか、粘り強く検討・改善を続けねばならないと思いを新たにされた講演会であった。



CTL  
Kansai University Center for Teaching and Learning  
Newsletter

関西大学 教育開発支援センター  
ニュースレター

March 2011

vol.05



関西大学 教育開発支援センター Kansai University Center for Teaching and Learning

〒564-8680 大阪府吹田市山手町3-3-35 TEL: 06-6368-1513 FAX: 06-6368-1514  
http://www.kansai-u.ac.jp/ctl/index.html

発行日/2011年3月31日 編集・発行/関西大学教育開発支援センター



## フォーラム・セミナー報告

## 第4回フォーラムを開催しました

学生のアクティブ・ラーニングを展開するGPがスタートして Semester 3期が経過した。その間、アクティブ・ラーニング促進の役割を担うLAは延べで約50名、現在(2010年度秋学期)は25名が活動している。

LAの出自、経歴等の背景は多様であるし、背景と担当科目との関係も一概ではない。また、LAの活用の方法や形態も教員によって様々である。したがって典型的なLA像を描くことは難しい。

もっとも学生の主体的な学習の推進・展開を目指すのであれば、それを促すロールモデルにも窮屈な型はない方がよい。とはいえ、LAの活動やアクティブ・ラーニングの現状を省察し、それぞれの今後を展望するに当たって基準となるものはあまほしい。

今回のフォーラムは3年に亘るGPプログラムの中盤に開催したが、ここに

至るまでに少なくともLAに関してはいくつかの知見や情報が蓄積されてきている。しかし、それらが全てのLAの間、ならびにLAを活用している全教員の間で共有されているわけではないし、共有されていても汎用性のあるものになっているとは限らない。そもそも汎用性が求められるべきなのか、求められるとしたら、どの程度が適切なのか、そのことについての基準を定めるには至っていない。

本GPが学生の活動を鍵とする教育に関する取り組みであることを勘案すれば、机上にて作成し、申請したプログラムよりも優先すべきことやものがある。しかし、それも上記と同様、的確に選定するには至っていない。そこで、このたびのフォーラムをこれまでの活動を振り返り、課題を整理し、あるいは気づいていない課題を掘り起こす契機にしたいと願った。

フォーラムでは、学生を主体とした授

日時：2010年12月11日(土)  
場所：千里山キャンパス 第1学舎 千里ホールA



LA学生を交えてのGP中間報告

業あるいは授業外の活動展開の第一人者である橋本勝氏(岡山大学)と、アクティブ・ラーニング研究の第一人者である溝上慎一氏(京都大学)にご登壇頂き、LAの今後の活動、またその活動を反映すべきアクティブ・ラーニングの在り方について興味深い示唆を頂いた。末尾となったが、LAはわたくしたちの想定をはるかに越えた力とエネルギーを有し、活躍していることを申し添えておきたい。

(教育推進部 三浦真琴)

## 基調講演 橋本 勝氏 (岡山大学)

## 学生参画型教育改善の可能性

## ～ラーニングアシスタントの先に見えるもの～

## ●発表要旨

2001年から先駆的に開始した岡山大の学生参画型FDは着実に実績を伸ばしてきた。例えば、一般の学生が受講した授業に関して担当教員に直談判という形で改善提案をする内容の『大学授業改善論』をはじめとする8つの学生発案型授業の実現や新入生の戸惑いを防ぐことを主目的に年度開始直後に学生自主企画として開催する「履修相談会」など多岐に及ぶ。教育は「学生と一緒に創るもの」という大学としての意識がそれを支えている。

## ●本学GP取組に関する感想

LAを軸とするこのGPはピアサポートの一種として一定の有効性を持つものの、優秀な学生や意欲的な学生が授業をサポートするという姿勢だけでは、多くの学生の主体的学びを喚起するところまでには至りにくいのでは、というのが率直な感想である。私はともかく著名な溝上先生が講演者である割にはフォーラムの参加者がやや少なかった一因は、関西大学の取組が「よくある内容」に留まっているからではないかという気がする。

## 基調講演 溝上 慎一氏 (京都大学)

## アクティブラーニングだからこそ求められる知識、広がる学生生活

## ●発表要旨

大きく2つのテーマで報告をおこなった。1つは、アクティブラーニング(型授業)についての概論であり、定義、一般的理解、そしてカリキュラムや授業システムのなかでの導入の工夫について、報告者自身の事例を交えて話をした。もう1つは、学生のアクティブラーニングへの関与や経験が、学生の1週間の過ごし方や2つのライブ(将来の見通しを持ち、かつそれを日常につなげて実践していること)と密接に関係していることを、全国データを用いて報告した。

## ●本学GP取組に関する感想

大学では、上級生が下級生・新入生を教える、支援するという異学年交流としてのピアサポート・システムが積極的に取り入れられ始めている。同じ青年期に属する先輩・後輩の関係であるから、当該授業内容に関する相談や助言はもちろんのこと、それをきっかけに、大学生生活の過ごし方やある問題状況の解決、将来・就職のことなど、話が広がることが多い。それは教職員の個別相談以上の教育的効果を持っている。当日、担当者から取り組みの報告を拝聴したが、このような観点の効果がデータで示され、かつLAの志願者も増えているとのことであった。とても良い取り組みだと感嘆した。LAスタッフの学生の発表もとてもよかった。LA制度の益々の発展を期待したい。



登壇者及び教職員・学生による  
パネルディスカッション

平成21年度「大学教育・学生支援推進事業【テーマA】大学教育推進プログラム採択事業」の「三者協働型アクティブ・ラーニングの展開」について、本取組のキーとなるLA(Learning Assistant)が今年度活動した内容について報告します。

## 2010～2011 LA達の活躍

## ①スタディスキル科目を中心とした活動

2010年度は約30科目の授業でLAが起用されました。LAが担う役割は、主に全学共通教育の「スタディスキル科目」を中心とした受講生支援です。具体的な内容は担任者や担当科目によって異なりますが、次のようなものに大別することが出来ます。まず、グループワークにおける「ファシリテーター」としての役割です。例えば、教室の中を巡回し議論が止まっているグループに話し合いの方向性をアドバイスしたり、一つのグループに入って司会進行や意見の引き出し役を務めたりします。また、LAは「ラーニングモデル」としてプレゼンテーションの見本を示すことで、受講生にその技法や留意点等を伝える役割も担います。逆に、受講生が行ったプレゼンテーションや作成したレポート等の成果物に対して、LAがコメントを加えることもあります。LAは担当科目の単位を修得済みですので、過去に授業で学んだことを踏まえて受講生に助言することが出来ます。そしてLAは「メッセンジャー」としての役割も果たします。様々な原因により、担任者の指示や説明内容が受講生に伝わらない場合があります。そのような時にLAが担任者の意図したことを受講生に正しく



スタディスキル科目でグループワーク  
のファシリテーションをするLA

く伝達することで、受講生の理解を促します。LAが担任者と受講生をつなぐ役割を担うことで、授業についていけない受講生を生み出すリスクを低減させ、授業時間内の教育効果を高めることができます。

## ②社会安全学部ワークショップでの活動

LAの活躍は授業外にも広がっています。2010年7月に「社会安全学部ワークショップ」においてLA達が社会安全学部1年生280名のファシリテーションを行いました。このワークショップは社会安全学部学生が感じている課題や疑問、提案について議論するものでした。大ホールという場所で280名の学生を活発な議論に導くにはファシリテーターの力が必要でし

## Learning Assistant

LA活動報告

た。そこで授業内でファシリテーションの実践を積み重ねているLAが起用されました。LAにとっても初めての経験でしたが、すぐに学生の輪の中に入り議論に加わりました。その結果、学生から多くの意見を引き出すことができワークショップ全体を活性化させることに貢献することが出来ました。



社会安全学部ワークショップの様子

## ③ポスターセッションを中心とした広報活動

LAが行った活動を学内外で行われるイベントで広報する活動を行いました。学外では2010年4月の「関西地区FD連絡協議会」と2011年1月の「文部科学省GPフォーラム」でそれぞれポスターセッションに参加しました。ポスター作成はLAが中心となって行いました。完成したポスターは、業務中の苦労話やLA活用の注意点等、LA活動をありのままに表現したものになりました。また、ポスターセッション会場ではLA自身が内容を説明するを通して、来場者と活発に意見交換することが出来ました。また、学内では2010年11月に学園祭で取組について発表しました。高校生やその保護者の方々に向けて、関西大学の授業が学生の力によって活性化されていることや大学の授業への不安を払拭する契機となりました。このような広報活動はLAの「プレゼンテーション力」や「コミュニケーション力」醸成にもつながっています。

## ④企画から携わった研修活動

LAとして必要なスキルや姿勢を身につける各種研修を行いました。まず、学外講師を招聘した「ファシリテーター研修会」を2010年1月と9月の2回行いました。ここでは、話し合いのプロセスを見る「観察力」、非言語コミュニケーションを含む「コミュニケーション力」や意味ある場にするために必要な「ファシリテーションスキル」の基礎を修得しました。また、LA自身が企画立案・運営する研修も行われました(2010年2月、11月)。専任教員と研究員(アドバイザースタッフ)の指導のもとでLA有志が研修をデザインしました。研修内容は「プレゼンテーションの技法」や「クリティカル・シンキング」についてでした。いずれのスキルも、LAが実際にLAとして業務を行う中で、高い必要性を感じたものであったため、参加したLAの興味・関心も高くスキル高揚にも大きく寄与しています。

## LAとは？

LAとは受講生のアクティブ・ラーニング促進を目的とした初年次教育(スタディスキル科目等)の学習支援スタッフです。今年度は約40名のLAが在籍していました。在籍しているLAは全て学部生であり、担当する科目を修得済みです。LAは受講生と同年代で身近なラーニングモデルとして授業内のグループでの学習を中心に支援しています。

## LAの概念図

